明星抄

澪漂　蓬生
閔屋　繒合

八

彰考館圖書

水戸藩文庫

青綺亭

澪標

以歌為巻名源氏二十七歳明石より西京に上
より次年廿八才の十月迄の事あり廿七巻
を略し巻乃末と同じ也花ざかり廿八歳の八月
迄のうちとなり
さやうふうに作り
十二日の歌は美乃事也
明石の君は姫宮を生
非蓬月　西京八月也　源の忠孝に成り
八講を行なく尾ぞ十月に行ふ孝乃切
なげかはしかりしを見て尺へ

市八雄　花鳥寇寛平御記をのせり朱寛平元
年九月ふ古院光孝を夢り見給ひて市八雄
はりれ事あるとけ地獄にのるもめけ例あり
しる給ひて書給也
あの人なひきつうまつるす　源ふりとも
めく人のたうまつる也
弘徽殿也
源也
見きさに
これ人を
ほうとう流乃市遺云　帝八古流の市遺言を
学て題るを報あれるなれどと学
て歌び給ふ也

ものむひ　朱帝のゆひ也源氏歌の報りや
と学ける也源氏を題居のあく学をて帝
古院の市遺云を切て悪すを都ひあ給
事なれどと給ひ再源氏の事ふ給ひ
て出ら源きと也
なりて給ひて
何すもとやれいるをり
中宮と邂りく給ふ也
位をさり給ふつきゆひる也
地をと世はえあく
あひるくうまつきるに　あひるくとに一偏を
云々也一うにうれくとと花殿めを
大宴
定考殿定成へしあをり大臣うく

おもてうせ給ふ

おとゝはゝ　おもゝ也

ゆ門内侍（ナイシノカミ）書よの給ふ和也

ゆ仕さう給ふ（きさう）

日毎のこりすくなく

昔より人は

人ゝとゝ源を作りての給ふ也

たちまち源の人

源のるゆ也

をゝろなゝめ

ゆ仏ばつの御さに源人及

給ふ　ますきと也

爲の基（ハキダ）きた也

爲のほゝ高也て

勅命（チョクメイ）也

みゝをゝに

源を作りての給ふ也

源り給ふ人

源のゆるゆゝ内侍の第ゝ

作りあれい　源の作ゝ

ゆ仏ばつの御さに源人成（きと）

めてゝ給ふ人なれと

作ゝ　源のゆるゆゝ内侍の第ゝ

作りゆゝ給ふれさり　又ゝの源ゆゝ

行ゝきのすくあるゆゝ　ゆゝ源ゆゝ

おもゝ也

昔のいとけなく

給ふ也ゝ給ふ也

ゆゝり出まめる也と給ふゝ給ふるなで

てゝゝり朱雀院のゆゝ出やうにゆゝる給ふ

源女八ゝ

ゆゝ源ゝ

ゆゝ源也土よ姫行

ゆゝ源也

ゆゝ源也

ゆゝ張（ジョウ）佐（イ）ゝ

うひあきさ御なり　朱雀院太后ハ中納言ノ祖也
寶算をそりたるべきさえりけるゆへ
数さまりて　太政の大臣幷ニ内大臣ハ
令外の官とて官位令に載ざる官ニて織冠
の時ハ内大臣を太政大臣のとみも兼てりける
朱 一淫数とハ太政大臣のる也 依て無閑大夫の外
ハ内大臣を兼也
又忠れてくに　そくとハ職之事さけき
職をハとて辞退し給也
ちの如し　蒙ニ又へもあるにあみしより
朱 一勘忠仁公良房摂政例と六十三の年齢ニ

ど不相違也
此ヽも六十三にそなりけれ　此もの字ゆへ
忠仁公例をとてみゆへしみえより
けるとあるも　致仕の人氏文摂政を例
宰相中将　蒙られ先之
の表氏依ばり　二条殿この姫君朧月の
姉妹中ねのすさめぬ四の君と云し人
ハれりきこえひ　橋居りありし紅梅大夫
にも宮御うつひし君ともけりの字まで栢木の
昇進も見てくり朱 柏木も昇進あるべし
皆乃るをと云べきなるべし

源氏の巻ハ　此子の事をさ源氏かやと名付也
夕霧の巻ハ　夕霧(キリ)之朱大将(カウ)を大殿と云 桐(テウ)
圓(コリ)にも大臣とも云通用(ツウヨウ)するも相之
こ蝶巻の　蓬之花ひの事に付て女子に出生
也朱雀ノの若比時も待し之ひける
字をも又名に　字ハ蓬下の母君之出後の
川ろひの時ハおくぶみかくてうる髪をなんぶ
御すそして今花ひに付ても初(ツキ)ての出生也
おほせあかとりも　蓬と云現存(ゲンゾン)なくねども
源の法海をいとわれとし
ことなれてよるすつきんことを　人への祝く

に源て我つきるすちともめづらえうひ祝く
けふ色皆字地也
二条院のひんしも源家　兵院と呼も古跡
の法会もある尼に源のく領(リャウ)じ給之
ある時うまれと　法国ゆづりのすちも太家を
本とし給ふ所也
云ふなしけるり　ちとせ六月よりの懐妊(クワイニン)なれ
ある此誕生(タンジャウ)おるへしと也
十六月にたえかりて　おの翔よ一月比と云
よりかし後りや
めつらしき波をそさん　女子をいうり

すくよりにはなし三人　　あるふよのあり　地こ有曜師（スクヨウレ）

の勅を地蔵菩薩に垂れ給へり　朱花云　宿曜道の源は

なし三人とりの文殊菩薩　北斗の中文地

后陣門い北斗院と　明石の中宮　中宮

をとりの文殊　で人なれと　但文殊は四の

年物語の不見　とも　菩薩と分きへし

文殊のをとり　脇の四　菩薩に参とにて

ぶまためけ中　　

重ねの世のうろ　きん　　きぬのうろひをの

ぬいの和人（ナヲミ）のことにすぎ　ぬきとも　ぬ

りてはなれるすち　　天女の位はる

さ人はあり　垂てきる　　北斗の源氏姓（ミナモト）と

ぬ　　ぬ　　ぬ　　ぬ　　ぬ　　ぬ　　ぬ　　ぬ

とびまで　き事　　北斗院

うちのうて　　

今は未のあ　ぬ　　ぬ　　ぬ　　ぬ　　ぬ　　ぬ

お人はせに　ぬ　　ぬ　　ぬ　　ぬ　　ぬ　　ぬ

ぬ　　ぬ　　ぬ　　ぬ　　ぬ　　ぬ　　ぬ　　ぬ

まとにの人　　明石

さ　　ぬ　　ぬ　　ぬ　　ぬ　　ぬ　　ぬ　　ぬ

ぬ　　ぬ　　ぬ　　ぬ　　ぬ　　ぬ　　ぬ　　ぬ

一人　　明石の乳母（メノト）　后の

つぎ〳〵の乳母をもとめ人〻を撰(エラ)びさだめ
せんとのゝしるもの
古流の書云の人〻物語に
尺〻〻り朱花云明石姫君の御乳(チ)おとなり
事也母のそ宣旨(センジノ)ツボネ子
事相なり
とゝるのさゝ海うりて　けさ見れば
母なぐも物よ人の物哀なるうきぶしなり
ぬる袖とゝ風ふるゝ
さるつゝさゝ海
この浦あるう
いそ〳〵そ行
源のけてうの行也
くぐ〳〵行
志のひまもれく
朱明石姫君
ぬれを切(ヒラ)みて行ふなり
まこひ宮あぐりを源氏
さゝきゝえなり
今の浦出を乱ふれぬ
あ風ふ風りなれ　源の物
ふ海となるゆ
分つゝも　源もとけさるを海乃住の
をも志ゝ　ぐさみくぐる人きれ
ぐさみくぐる人きれ
うへの家住　けなのるもゝ母なく物

あさちかく　はるのはつ　よの人めへ
さすらに　ねさなる　ものかな
うくあるれの　ひ　情の　ねなるへ
もにあるうん　女の　ふれ中
うしてう　はるとも　でてめるに
てをるれど　りと
うちつけの　ぐどかこつけ　下白い　ものと
つまそのふぐ　ぐり　へうと
なれてきこゆる　ねなるて
いつと　やめ　ねこ
はんう　あるにものをつるする　三条院

後冷泉院御女例河源よりえうり朱陽門院紫宸殿
長和二七月皇女ゑり　弐沸　ものの　紫宸殿　中土
はんうしいうとりてまの　ゑう
ものの　ゑうしつき　姫ものをかづくはんゑ
ありかなる　いつも　こるるうて　養育　ぐき　ねもと
うかさにむきて　京のうち
ありかるはんゑを　みにをうにりてな
しまずとあり　いみくいうりうあそうきまて
いみくいうりうあ　ゆうあれ
をかうけすく　ゆ

ちとせいてゆるきさまて　乳母の云
きにうこきはなよ　源のたてにうづさ給
母もとりとるこ
こうちの云　明石こと
ひとりして　たゆく旅（むとく法師のこと）
ぬるこの性あるうにいたれをたの屋にく
今はあり給ふむ気なり
あ屋きまて　源のたよい道行よ也
如云は　はつこ
さこうあなれ　源の殿世をはなの何
なもこ殺みあ（ざるこ也）朱世のあはこう

あ道となり
さこおこせなんと　はつこ
きまなり
ありてうちあみて　はつこ
あゆうつ　はつこ殿みつこ給ふよ
とのはふ殿りあ　ありてこ
いとこく行こそ　源の殿
そよたなりに　はつこの云ぬる給
こんどいづあつこ
こそをこ　こあそそこへ
あはあれ云こと　はつこの云

けんをうまて　　源の相也

まことにおきこえの　　幸こまぐれふるうい

はふとりあらやをうるまくさふやと

人うのかりかり　　明石のたちもふう

まやといひすう　　行也

あられなるこゆの烟　　烟八月一方にみび

うんの寄せしはけるこ琴の音きて行ひ

しはけ事ぬこ　　朱明石巻の塩風く煙乃

まみいひすう　　行也

れいまるれこそ

わをいはれや　　はふとこ

はふとのこんぐのたち

一　　朱

ふとり　　はふとのひとりまこ

かさになびうんの寄みとかりより行よ侍て煙を

浦行て源をとは侍ふ　　源とはふとと中

の煙りも系てはこそたちきぐ　　ぐれとまり

朱

さにぐちなまりといふきこめ　　こ中

これみより　　はふとをこ石ふこそ世をのぐ

まこそびさ海くにうさ沈ぐ　　こ

いそこえ寄ん　　はふとの命こそ限ぬべ

これのへぐそ　　こ

のすれより久ん　　明石の琴をゆ行

明石巻十四

清輝うりにいとやひさかたのつらぬ

五月五日　五十日の祝ことに三月十三日よりあそ

日ふ商うり

何ものいふひあ所　松ものあるだのもの

ゆかすくせも　侍子ものとに流とかひ一色

けはあの出せしかたつき家世ものやとぶる

祝事ものをいとりめる

はつひいとそ作　五月五日ふまつくへ

きようを作せくもりとかと

うとかや　清色松ゆへこかたものの不

麦の祝ものあやめ菖蒲よ葺とりいたと

五十日に菖蒲とり皆ふりせていとり

祝くてい　上巳あまつの日

うちめるとかすなま　是迄文の祝ことに

家にもとろの　六月日の祝ことに

けはあの　明ふらと

ものきくとめ人ものを　けは乳母よとめ人

をとも葛出をこ

をとろくとろ家仕

侍なと花物ぐ　こかものとろ人ものとも

ぶりめるこ宜き人のまれな

祝とあり

こまていことよあり

くるしいつ杯　此恵をまうけ奉りつす
と君しと明ゐるにおあがりけるよ
読人よ　乳母と明ゐるとありとりにて
気うこそ　乳母と明ゐるをとうやむ
めでたのるみいつに　乳母の忠明ゐるとをうやむ
悔り慰むと　此文のうちにうく出給
教なりぬ　いかに五千日ふそへつり卑下せむ
美よし御殿へ　明ゐるの之氏組むむ気切り
明ゐる氏性のやうにそすをうさあるたす
つさへりて形よを是ともれ風にえ君の
びわりめぬへし

命の程もはかなく　おもれくてひえすぐ
すまさきと忘るらり程の孫とありし組を
うけてや給ひ
たらうりをちに　三くまの浦るりたさに
こく新のまれをよそふ福そつる所引寄能け
なり福つるねとひのつあるけふ之氏勇よけり
海をたちくまそ　源の頼之
うんりの　暫時のもとと
ひのさ海　吾身のすへそ能志り程なとと
あんてかよ人ふるけるる　よろうおども
かどいのみ郷しとと

うれえなのりと　　源氏物語

めつらしく侍りけるかな　　花散

墨のけしきなどやうやうてをこりがましくもあるかな　　源氏

人なれいたるをんなとこそ

女れの元　　蘭景慶の女れ

けしきつまと　　花散墨はけ方也

いとつまもきれと

海さまへえらり

くれまあるに　　花散墨の元をむ優こそ源

の四位を月まいこ早下のけしき

のみりこ侍りけ

とりくふ侍りけ

をなへく　　源のけしき

らばまこあ人なまりめきはをとくちも

あを鬱ふよいりけ

中代奥へ云のみる心

そうなあそと　　源子の君にまこ

おとそこひあと　　花散墨のみりこ源

のたづ侍りをを

海京のほもうに勇

月まげうさなると也

おのづからうちけるかり　さて祝のこと
しるしなき神こそ祝ぬ里の姓こ
女郎花のうつろへるを　かいあつまりの元こ源よい
ものを蒔ふこ
世にてんすをうつうつ　源よのこゝを
とぐむる所なり
公家まれ　源流なり
さるへのうつろ　五節のおどやうの人を
つゞくてうへをむ　むくてばうへのうつろ
にとゆはまを
氏流のつりさま
二条流の義廉なり

あをとゝ流つゝ流ひ流ハつゝり流ふれめづ
きに流て見あれ　あれこゝ　ゆくの字ふをつく
ゝあるこ以　それゝうあ流ふ
ふ作て造せらるゝ地
女ゝうゝいこゝ　ゆのすゝ　院ふます
ゝこの流毋女御　美香殿女ゝこ流ふ臘
月夜ゝ竈を奪ゝ　流のゝ地
くひゝこゝめてゝ
ゝ　ゝこをゝりゝ流ふ
ゝ　ゝ今時をゝて禁中にます
ゝゝのゝゝ　源の玉戸ハ相撲
朱注ゝ別殿ゝ　ゝにゝて昭陽舎

みかりまつこいのぼくれも偽宜よきさがへ
文をもうしろと　　きさき
入道殿仕文　　殿てまつまいとそ望者法
文ゆゑ（グウ）ごとなりけりてきさのうしろ対（コ）ゑ
をまつ地蔵菩薩ちにんえうり朱雀（ウスグモ）雲たと
天皇事中宮を婚（ゼ）し約せけこ後い中宮よ
ていおそうまつへうさ法之ばまて中宮を
しうりめ
おくいてこにおまて　　菩薩い源をひように
ひ法へとも源いうりて后よひをもせつうは
つり法之朱菩薩の御をを世人のようにを法之

源のひとせ法すをこ法よ偽て也
人を殺すこに　　世界い定める所りのある
をた后のあまりなるまでありを今い源
のはをもそづきとんくこと
きさきのみこ　　源氏ひたを氏人にた近の
時宜の相をまんせ法つず四恵（キウアク）を思いさ法也
法道でも菩提の方あふい苦時のきらめをん
せまのこぼこの后ひを理をまげ女性をこ法
入道殿いてこわう　　きさきの菩提乃
清兵衛尉
きさきの家氏中の云

一人は系図なし　普賢寺に遊宿
おもしろい人ども海さりの行人
ある所よりたづねてとりもちの行ものあれとも
いづくしらんとすらん　高氏女房の物語
その状すべしに　源大八郎乃親を尋ねて仮名清の
にく風毎の時乃親を尋ねて仮名清の
事法華堂の例を模せるや同時の事を考
ありしとも明石人　物語はまりあひらを
こそおもしろい　多くは後の姫よ清行を
の秋とまれ表い懐姫ありて系結梅意
延引ありて唯今清行　物語のるこ

くんとまつる　今源橋改し給ふ名
異なる人しも　あ花ものこそ朱十列
うまつて行つる　あり三色こ
走る人　世中ゆすりる大臣を初め
人もあること
けよあさまう　物語の名地
おりて此ものみなりに　仮名高氣の人
うんのさんに此きうに　上古い位の清原よ
りて袍の色の濃濃あれ
数走て　世中ゆすりて遠方人
あるくとつよまりあるに此て

六位のなかにも　あをき色ハ麹塵の袍をいふ
今極﨟とて第一の六位の蔵人ハ[illegible]の
日ハ第二の蔵人までハこれを着る事もある也
かりのかつさ　おりみえたり
ゆるされなりて　衛門権佐にありて随身
をめし具する也 朱 一説六位の蔵人にてゆげ
いの尉を兼たる也
おなしすけ　廷尉のすけ也 朱 検非違使なる
ゆへ日とはおのゝゆげひの蔵人のことし
あらきぬ　赤衣也 朱 一説ニ廷尉佐ハ赤衣を着
を五位たる人の三事かけたる五位の蔵人也

今も規模となすびとは検非違使のこと也
うしへとのよろし　次第ニ祇候の人也
花麗ざかりたる之
はる海を　源の融事之
うつし給ひしの　河原院なる等たしかなり
さるよしを書たる道ヲも物語りの世
かきうへハ定めて源氏物語のまつり物語乃
うへなり此事ニ公卿ハし候御族之子
也弘安の源氏論議も一の雑義とせり
朱 弄云 式部卿忠仁公白河より[illegible]を河原左大臣と
号せし一禅定[illegible]

あるひとの歌に公童殿為朝の国史などに
ものさびたれどもいとめでたきあるもあるを
此物語の書法即よりて他ともろ〳〵一様に発
今めかしうこゆ
めづらしきこと
為朝ものの系 夕雲と八案ぬ〳〵源
丈一の家まれまれ童にて扈従あること
雲井はるかに 物いさかをさうしといふ
朱人の物来のさきをもきるをとる
ふる系 明石郡系也
国のうみ 物語国号
いとはずさうもれい それ〳〵家の系元也

弥もこいれ
ものさきこと 小国なはづりの弥もきこえ
きこえ紅葉よあきら弥やく〳〵さんのこゝろ
天に美みる名所の子 俗いきり紅つぶ俗こ
こゝろやうの
ちり行ふう
すこしの 牡丹などい拍まに花咲ひ
まづこゝに先を拍よそ〳〵
弥代のものこゝろ
流し河のもの地俗例こと〳〵こゝ
財産なこい惟光も品〳〵やうに奇を奇り
てこゝの懐をのべ行こと奇をでいふ

て早懐手も遠ざくべきぞとしるべし
あるべし　好まずとも往古の縁に物をいれ
志願まじきこと。況ニ人までの風俗にも障る
難有くて今日迄無事なる源も偏に縁乃
助けなりしと也
志願し詞り　奇特なることを
人のあいしれ船　義にも念はだまし也
て難有也
我の情志ろへを　我の志ろへなきあたへとの
事なれさりしにハ見のかりをまなしきこと。人のの丸
むくひよ系しるなるへは皆我の助なること

なせに　七瀬ハ志ゝとにあらさる志らさ七瀬無
難波芸一之先一俣七瀬俣稜今の世にも毎月
ある所さえ家の七瀬とことなりし家の七瀬
きま家の七瀬と云るあり
かりは　仁徳の時さだめてかれる川之
今ええを知りし難波なる　所云のえを志ろ起之
身をとらし　つる字浅て積へし名をとつ
身をえろして只今船出せしも縁によりてなりと
二海なくて　さて江をみぬよとをあへきを
今ある浪の今を気なり乗くしと也
救なして　何事も救なるぬ身の家をと云り

[illegible]みの〻浦に　源氏の山殺と朱雀の[illegible]
はたちくらの船よりきて　都よりつけくるひと
日暮るころに　高瀬舟にてこぐなくみそうり
つのけさい　みめいうれひ[illegible]
[illegible]りあにうりれうこみ[illegible]
ひ〻はの霧きさみとと[illegible]
たのまに　ゆとくれ[illegible]
あうひとと　遊女[illegible]
[illegible]といそやの[illegible]きるも　源のもとと遊女
[illegible]くらくはは遊女より[illegible]あるを源氏[illegible]
大くれ世のくれるとこのまくうの何のもくれ

[illegible]ぐにうりてそ[illegible]
なのめのるのとこに　なのめのるのとい大
くれすりとこいたくの何のものもく殺
みいもとまくありのとこすりは遊女な
どはいくうの鄙のきくれありとそのかとと
ひつさ事みてくなるさ人のをくとな
ふるのよう也
ものひとなりて
うびうりひとあるるをくれとうるを
そえ人のをくこ
れ人の　明石の[illegible]

遊女うりの[illegible]朱人今あ
[illegible]

すて学えて
よみ申く物之ひ
乃ふなよつけて行身
いそしや家に　四条あるて不日ふ言伝のか
源の浮舟乃　志賀(コヒシ)詣後
いるやうに物こゝきこえ来
とひ出うされど只ゆくのうるれい物うれ
り和とそ乃ちとて物れ
さりとてくらりもれ　ゆくゑ尋りそもか
く姫君とゞいつみて見とゝ
波とやうに秋家も

源をすゞてゝ
はるの源氏はあり三海を
見下の方と家作る
源の浮舟乃　志賀詣後
いるやうに物こゝきこえ来
とひ出うされど只ゆくのうるれい物うれ
り和とそ乃ちとて物れ
さりとてくらりもれ　ゆくゑ尋りそもか
く姫君とゞいつみて見とゝ
波とやうに秋家も

光うり秋家の事とゝ秋好中宮ゝ出家は長
ゆる中宮ゝつまそのゆり行也
ひゝうに　今もおうらび源り言伝とり
物へども昔ゞに世長ゆゝつきゝきゝて
物みゝこゝゆゝ長ゆの方中にて人源ゝ
はゝて秋朱ゝ家は長ゆのゆる也
あ物うちにうこう　源の色ゝ書ゆうゝ
今ゝもゝあゆゝちに会ゝ物いゆるまゝきゝと
物よゝきゝゝいゝゆゝびゝさんゝゝゝいゝ源ゝ
くの源のゆゝ物ゝ物ゝてゝをゝゝゆゆ
めゝゝゝと也

新家をて　源のゑ
つくりたてに　新家にはかたをなしたる也
おとろきあり　なるて也
こえぬかさ　源氏君志の程乃行儀をゝん
せんて　せんさ地をとゝ
かくまても　はしめとあらう　はしめ氏ゑ
新家のはなを　遠慮（ヱンゴレ）あるを
うしなはす　源のゝ　源氏也
いとゝたし　はしめの祖源氏いとの
げふいの程も　世乃のゝひさもゝをゝたるゝと
まて　人めさん　源のゝ　程

たゝうゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ
うゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ
あひなも　あゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ
ゝゝふゝ　源の祖ゝ　ゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ
ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ
ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ
ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ
ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ
帳のゝ　ゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ
ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ
ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ
ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ

なりたるもの〳〵何れも〔ことなり〕てもあるべきに
一本（朱）ひそかにかくしあるひとやうなるものもあるべし乃
ひの字濁るべし　はるをはるり
さはりうの経箱をと　はるかの遣ありて
あれりのもとに
いとこうるさく　はるかの和歌
ちらくまのり　源氏頭
いとあそろしきに　はるかの和歌　裏にうたと
ひるをとを　歌文のはるる
〳〵源はゆいこん　源の和歌
古院のみこうち　源氏音はんの事

うべのあるの　秋ぬ中文をい相違の事
音寅（ジン）のはるやうにこうと
あつふんなきれい　源の音はるもあまり
なりたるこ
はとあるひ今すこう　細〳〵に書給ふ
七八日あるとく　源の中うを経て後七八日みえ
はるかつうを　源乃はるあるこ
文にはせうそこ　歌文
何ものも　文のはるを
宮えさせの経をとこう　源の和歌
いとこうのりをにうたの　はるかいの中はるり

絶(ゼツ)して行くを惜しみて人もまねびてこそ
源(朱)の心を惜しみ侍りしかの人々
新古今　源

はるかすみ　源のまさ
こそ今のそら　源光行朝臣
ながめみれ　はるかすみたちそめにけり行のつ
らんとなり
そら色のみ　くもりなきとんみび色光
きえそて　霙(ミゾレ)をかすめ雪(ダイ)は降り西日さす
くもり行ひ行　源のゆき
うしけなくとも　源の頼

あるにはるれ者をあめ　皆王孫(ラウゾン)一類(ルイ)
ひ人ものを重ね　人の心をもとり行ます　藝能(ゲイノウ)なみ
人をもとり行ます　ふをとり行ふまきさ
家はふるもはるめるとと我ものうの初でもれ
とまり行らびめる　はるもろろ
うちぜきのすもる人はあるうの行ものうる
はるさをもはるす　はるの作者(サセル)
出ものつるの　京家系稿
はるのあるたるそ　例のさ事をれど伊
勢人の具行ものもびるみえそびひ

宮えゐらめ地てーさ
流ようも　朱雀院こ
新流をて　朱雀院の沛連(シレ)様也
朱(ヒ)雀の方妹(ムスメ)こちらのるも
はたちかうのるくあります　内侍(ウチヌミ)一弱人
とこちけ弱なよの弱ひーこ
うへのいとあつーう　朱雀院は病気(ビヤウキ)ぐら
おれてーますとたーぐうるこ
今はよ　朱雀院ようい意にり弱よこ
ふことう　入内(ニユウダイ)のるこ
人のるる様　ようそ人よるをぐさいは様とこ

新ふるの内の事

いとよう　落ちるの組こ
のはゆいえを　はは悪のゆいごんこ
今はさるうの　朱雀院のはるこ
さうえは黄色　源の組こりよりいぐうの
とこて猫ゆてるをそんてつまるごこと
也流よこ面をこれこ　源の組こは新好色の
さ海ようさまに
るをいんぐるて　ひこんひのようかく近色て
ひげまんを弱よこ
さりうのひうまんるくはを　かくこん

なーがーとこ今のかくとゝ云まゝ拾びと
せり曰ふなり
のらゝ云　　孫の子ゝ変ずゝ云家祀ゝ
如云　　はゝこ
無ゝの子　　はゝこの棟ゝ見て孫と無ゝ家
とゆ何ーうゝ有ゝ
指手納云　　蒙ゝ見ゝ
大屋のはゝ子ゝ　　孫子を拾ふ孫子
中納云の女をなりぢ　　孫子
高氏中ゝ云　　無ゝ家ゝ高氏ゝ安ゝいびきす
幼少なる孫ゝ

かとゝ云ゝさはうゝ
なりぬ者ゝの　　の子ゝ高氏ゝ
いとゝあーくゝ　　外孫をいとり
すーかとなひて　　の子ゝのすゝ
しーうゝの人なーて　　京ゝ男八田伯を付ゝ
りのすとゝ

蓬生

巻名詞并歌よりぞふとつづきうは語いなれ
也よりとこざとゝ事明ふる方にもみしうり花
ゐるにいえるけさせ給まづきうりそふのはゆ
けさうりゐんとあり。普通(フヅウ)のかうりゐ唯(タヾ)よと
ぎれ露けさとあれ也。撰(ヨミ)也並(ナラビ)也みをづく
のさえの事もあり。源氏物語七方のうち八篇(ハツカウ)
どうりより廿八(ミラツクシヒノ)の四月(ウヅキ)廿六(ミラツクシヒノ)日(ヒ)を限(カギ)るなり。
末(スエ)い終(エ)の事也。はるあり事い豊(ヒタ)うなる也。
悉皆常陸宮(ヒタチノ)の姫(ヒメ)君(ギミ)をうきを所之朱又事也明ま
二とも也だりけあるうるうりあめ給ふとゝ事い

豐子成めるうも仮事れる代書こるすも
うかへられて　　如年(ニキヒラ)の事をんて源氏の次
亡の左近(サセン)のはれまを書始也大六七歳乃
事ようをり
我作男の　　先くくのはうんどもを
こけのこれよ　　共世れうれみといんとて
作のとをれこるすこ面白き　　蒼海(コキンノジョ)序もり
の人を通ぬ事とをりてなどいと源文弾(ゲイ)也花
名統めるは作の思皆はをこをいる也
あくくそれすと　　源氏通(カヨヒ)ふ面れ多(ヲホキ)也
朱　この初をとい書つむる乃事をいんとそ人

くれ事をいとり
ひこちの家　　先こより来搦(スエツム)のる也書つ
乃巻ようみそこり
大星(オホシ)れ星の光を
方よういこうるは　　本紙(ホンセツ)よ及ぶ唯(タダ)源の作
こと作と源(ヲカ)さを　　情(ナサケ)れど作ようけ作るれ
よういこうをこの　　大光の大海(カイ)よ源(ウヒ)くみるも
のかををるれい兵て　　朱本紙迄もを天
うこ源世のこるよ
対之通こるやうにく　　源氏の左近のこ
　　やうみて代面白
　　朱実(シンジツ)之通作ふ　　ふそこなるをかるへ

とのつくに立てこうる地
それなどり　源の義経行くなごり
知られぬ弥仏の　源氏出へ行を弥仏の
うらぶれ　朱箋曰風吹て刺身ぬ
ゆ鉦といふなり
さ方ふかつきそる　よそよそれ行
し後地　朱さびしさに住なれるころ
中くそこうつきて　中比源のうひ行も
中絶　朱ふりさひしく地てきゆ
すこもさそあるあへき　源のうひ行
行ふさふひしくもちくにたるとこ

りとより　よそのなすくうり行くく後
こうのすみ　叢　朱松桂蘭菊うり梟孤みとのもむ（きみあ
叢といる緑もあれこるかをとうひうようり
めこうりう
こうは　樹弥こされば邪をあうりとうもう
まれくのこうて　たまくあうてあるくれる
あのこうするもうこうもの　有力の者ども
くうちれもん　敬屋うり行くうとこ　箋曰
ゆ度と賞ねをつきゆ地石米のるふ仏と
あのいうや　岩屋のるれ弟子の猪地

朱 赤橋の相すり

おまりの〳〵ゆへ〳〵てんと　は鋼度の中首絶

のやはかもとゝ〳〵ゝ敷ろ〳〵（あるゝ）鋼度ともと

ゆへとゝ〳〵のあるゝ　ゆかふたをとせ給へるゝとゝ

（ゆゝろ人乃ゝをするゝ）

それ人の人よ　其府の名絶名花みどとゝ得ゝ

うゝこそゝ　それゝうゝ也

いゝうゝいさあ給て　ひゝろの文〳〵

みゝとゝゝ給てう　古文も我分ふみゝを

ありてう志ゝとゝ也給ひてゝんゝと也

ろゝ〳〵きゝの　宗廟之器不鬻於市の心也

はせうゝとゝ也せゝ〳〵の志　兄弟也

ありゝきゝりゝと　河花とゝ也ふ水法師

とゝろゝけ抗ふ遠玄同ゝ法師と後〳〵とゝ

同ゝ法師のゆゝふりて云〳〵

志をゝ志ゝろゝをゝ　掃除ふでせんをゝ〳〵

ゝ法ゝふゝと也ゝけゝ下　貪家のあれゝろゝ海あり

くゝとゝをゝろ

ふゝゝ　不用也朱賊貪家とゝ〳〵ずゝとゝゝよ

ゝけゝろ

わゝゝとゝゝまゝゝゝねゝと　無ゝとゝのまゝゝゝる

ゝゝゝいゝるゝけゝゝど見ゝゝ〳〵ゝのゝゝ

如何ぞ　女どもは此のうへ　行ふ也
さやうの事ともよろづめ事のゆとりの激
剛ふ〜まに強陽さく人ふるうとくして
ますます〜そ繁〜きさ海〜朱男方此又
のすゆんぼ女どもの言葉をもつてます〜を
し行すり
うるものとたやのとし〜　いつまも古物語ども
也どとん今も閑伯不ゆどゆ指ゆの楽にめ
しつゆ女とぶか自と女の数ふるうへ〜
ゆらうとして　古今万葉ゆどだりは
面白き事もあるまきき也芸後の撰集ゆ

とそみゆもあるへさと也　花薗左大臣有仁公造
すゆとりるせ　殊数をとり行ふゆ〜ゆ〜ゆ〜搾〜扇ゆく弥陀
羅尼の数をとり行ふとく
ゆうにうるいく　是まてひとちの家此ゆ
弥をいつり皆と扇〜きさ海〜
伝授なといひ　ひとちの家此ゆのとし
むもめ未摘宮とりみしうり
うひまつり秋院　此秋院雅とゆ
するゆ〜の中方　根ふ左衛の妻〜蓬生の
天の母方のをそ也系圖の外也

むすめとも　　大武のむすめ
ひきにたてめ　　うけとれまめゆ　ゆ　ゆ　ゆ
うつくしされど　　蓬生の　　の　　通　　
未病の方　　の一向　　
多胞乃中方の　　
をの道　　
る　我身　　の書　　
て　　
れ　　
よ　　

ひ姫　　のとぞの云

といつり未弄云まつむのとぞ　　
光世　　
ゆ性　　
と簡　　
ありみ　　
ぶま　　
てを　　
といつり

うつまて　　ひ未病のとぞ　　
あらぶれ　　
あるべき　　

ひむけのいもきぶいとり
我うくとりはさ海もて　ひさを我男より
をとなばしになるうくとり
ひさをいとり
たよせなとは　義日あまりはす
時くこそうの海せ行て
よ未摘をまぐ方へさいくはむあれとも
よのはたらも　未摘の使はとのまと
人うしもむとみ　あるぐちあるそふはたん
あまれど始てみ行ぬうしめとひ行す
もるのとまり
孫うとなん
ひとをんの方

うは家あるう大武
はくく大武よるたり
はるくくはうるうと
今大武ふなりて大宰府（ダザイフ）へまゐり（ヲヒグ）お見て
をとはと
つるひも　都の内をあくとさぐりかと
ことよりは　和をとくいひるまと
はくふうけひき
ふ行はとうけひき行ふさる
あるふく　をとの方
うけもとり　うけあと猪（ヰノシシ）鹿（シカ）
未摘のをとは男こて

さう経ふきに世中に　めでたうに深海系
ぎ朱とていとをだれいの　めくのこと
ゑうにあらてさきさ弱よ　けまぎれよけ系
みとれ事いとひ出り　弱みるまみとと地
今八頃地ちう　ひとうれ系乃ちさざまれこと
立のとと　百姓ちゆきんく道のこと地
ゑのうりはれ　た道の時れること
系分ひとりの　ひとうれ系のは分一けとお
ぐそと　よのゆ中ハむとうりやいうう也
わう分ひとつのあ人なる道系ち
大武乃れ方されな

佛ほとけ　法華経きやうも如是人難度乃
ひありとて仏の方ほうぶつ仏ぶつをすると弱ぶつ
生ぶつと地
ゑう人　ひとうのゑれ二親しんを云り
大武乃とひ出りの人　大武のとひの書になれう
なけうくとなれく　深よ親しんをうけ弱
弱分れうてかくとうれる　未病の分れう
き果はてて立つ地　めうと親しん弱深とば
うみ弱ぐうと弱ぐ弱　深とば
うと人のあれこれみ　事れ無さいなれう
とうなうへ　弱ぐ　弱くあれとも兵舞
弱ぐうとうそいう

くらくらいなる
いとうれつん　　双地
ゑれ爰ゐい古院のれ迷うれ　ちらほう〳〵方もなきこと
にゐて八篠こ月時なる〳〵十月ゆりのゆこと　多代づゝれ考
源れ女七歳なりより
けせんてのえも　ひとちれえのはゐれあざりこと
いてのゐとり　源の作事こゐ冒(ヂヨウ)の世よれれ
ゐて幸(キ)特なるゆ也すくらるる羽こ
ひうれ仏りさり　仏りとつなられけ也てき
事とも知ざるられと
りよ作りゐありと　御(オホカ)つゝ之ゐこ

ゐのこた　大弐のゐ方れとものとれるこ
ゐけるる紙(ヲ)　いとうる也てき家ゐるけ三徑(ケイ)あ
ふ也けえゐけ三徑ごにたきこ
面ゐてのけたる弐の書ゐどい門ゐどにて
こ下車(ゲシヤ)すきとゐこに車とのゐ〳〵なとする
ゐて爲人もたきれ　みたゐのあれるれとゐ
ゐるていさゆ〳〵たるけて之ゐ〳〵
爰れいこうゐれこれと　ところ〳〵めるゐ(ティ)こ侍
はがれこ様をいこうけえゐこれれひく焦悴(セウスイ)
ちるこれゐれこんをとゐ〳〵ゐこ
こゐけたる　れれを考注文よ厨こゐ〳〵

朱 伊勢をかめ〳〵殿

いてさちをんこを　　大系の書れ組

みてうう　　双紙〳〵のつゝみれ人なすはうちもる

くづさぞ〳〵と

古家ありやとて　　我身を落ぶ(ズイブン)とおてこ

をさ給いをのつゝ　　家よあるけをいてう

ゝとけてを

いとらめ君事をれと　　家也組

きに出ちなん　　大系の書れ組

大ゐ殿　　大ゐを刈(サリ)給べうれども女いひつの

うゝまゝとゝく花

はふて〳〵朱し女巻よ或ゝ

敢年敢ゝとあるゝ書(カキ)損(アヤマリ)也　義

有ゝう　　たゝとゝも

ゝたゝう系をとのゝ殿　　海とれ奥女(ナイジョ)や

も那(ダ)して出ますゞさと

きみてかすを　　家れ出ゝ

なゝくさはまう　　伊勢をぐさあてをてう

たゝりみとゝ也

のやし殿も　　伊勢なるにへゝ大系の書れ

ゝみ家の行も何の道も祝(コヒ)うるゝ

けんさん　　伊勢さん家をうち捨(ステ)てゝ笑ゝ

みえよとて　みえあまりぶりと嫌ひ者
きさあれたれかの人にされば
くのえう　業(タキ)の如くに
えゆまき　ありめまをいはる
ちまの　伝法の毋と伝法の毋をまとといひを
はなるこゝろの乳(ノハト)毋れ如のやうにいひまれるや
元人す　侍従
意元の　意月憚(カン)悪(ニン)和さうれもるて
来(キ)つるを今文ゝ伝法ゝ
もろう　聖言(セイゴン)ゝ言ゝ文ゝ言ゝ言ゝと
也馬(メウ)弥(ミ)の道(ダウ)祖弥(ソビン)をいう

大武の妻れ元迦
伝法ゝ
なるそゝにく　上(ハル)面ゝくるすゝ元ゝ
ゆひ人さん　伝法物語みるひのさゝね
うれさゝ　ひやゆけ影(ヒカ)
ゝゝなゝ　伝法ゝ
よゆもちうまれ　塵(チリ)ゝりゝ伝法占の
もゝさなり
元意ゝはめゝ　きい人よ　ひゝとをゝう朱義
日めゝきゝ元ゝゝ元ゝ元ゝ
迦さゝゝさゝ　元勝(メウ)ゝさの和ゝ元

母家の事をとゝ（ひらけ文の事）
その人いまゝ世を（源大納言人歳こみをづゝの奥）
まうらめ　源大納言人歳こみをづゝの奥
うゝもなく　うゝもなく
ゆきさかりなれり　けけのはゝむ鈴地
ゆるつゝて　引ゝ
うゝもれりうゝて　ひゝ星とゝざゝてゝ
はゝかりあるよ　梅をかゞ出る朱花
なゝねどゝれゝ　たゝれいゝ
みゝゝ花ゝ　ひゝちけ文

とゝめゝ世　車をとゝめ
ゝゝひゝちの文　源の相
ゝゝ作を　惟光ノ相
ゝゝにあり人　源の弱地
ゝゝ見ひゝてを　源の用ゝ世ゝ
みゝゝゝあるゝの中
ゝゝにいゝ　ひゝちけ文の中
ひゝ孫の前に　ひゝちけ文のみ
ひゝ乃同ゝ　源
なゝ人を　ひゝちの文
ゝゝざゝを　ゝゝあて

ゆ出家のあとをとりてとう朱義
それいかにたん　四うゝ氏養也
ちうゝうゝて　惟之
うゝたん　来ばおにまゐすると
こゝろひるをそな　源氏相うゝ所ゝ
おすゝうはいゝとゝ
ゝゝせまふはをはゝしあるゝ　雑色養
うゝまゐゝたん　惟之ゝ
なとゝひゝかうはる　源の同所
ゝゝたん　惟之ゝ
音はのみをけみゝ　源氏自身をせあての

ゝゝあるは蓬生の元も音身はゝてゝ
くゝまれゝゝにゝそあれとゝゝゝ
をゝひは音身をせあるはもあるゝ所
いゝすゝ　源氏惟之ゝの所
ゝゝあゝ　あゝ元人の和ふゝ世所
ゝはをはゝゝゝ所あゝゝゝとゝゝ
ひはゝていはたんやの猪をけゝゝ
ゆへあれはせゝそ
ゝゝゝみゝて
ゝゝゝゝゝゝゝは入所
を来猫のゝゝ北方乃所ゝゝゝ
はゝまにはゝ所ゝ　源氏ゝ

なれどもやうの不一切人民用さたなりて世を世
ふるまてを　　寿二百歳也なれど続りて行
事もなくいすべなりなるべきとなく扶ごろ行西国
行ありて　　惟光ハ土ぢに成行てとも
とけ和りて見えそう
惟光行ありて辞るなりた
ゆさたの書を
ようあるべく行く流ありて不用之
流さたなふ　　朱
助のおれ下ろしの書ける書ぶに文様
みさまひみさまとせ文様形れ木の下
葉い為りて海されり

むやくなる　　無益　　面白き事もあきてと
ちまつるみる　　人げの形よとそう
ゆすかれ　　大武の中れ方乃為りて
ゆずあるもと
いとなりさ　　参れけるものりへ海
なるうばきて
みすけなる
の几帳
文氏　　源の頭
すさなるあこてたちの　　れりて連海敷を
いりれ板に乗りて上りなれ通

まけさてふきる
かのえにはのえ　弼いくとせ
まさらめ　　源のたうばるたなるひな
あとさらうこゝとと
いとゝふたよ　ゆ
までといもにうよたのつさい
ひさ様　ひさうくんのひぐそ老よもれ
かのこぐく故ようる所ひ文の私い言分ゆん
様ふかわねどもあるくなりこゝを
也音男の文もつとうをゆゆ也
義氏やうかる　源源子のうろひれる書

のまにやうに立ちてをんなをもるよと
やちなみの　まりそそんひうちの文氏給
方にもさりとの和歌なめ走るの和よ
ゆうみ給ると
文さよりふもる
げの事氏ろうこゝをとり義日源子の様
不給り引くうと云家也次の和引加て医
春秋乃くしかさ　上陽人氏ひあり源の
自称して音分なでい歌を給ふんるまま
しきと也おむきての給ふ
文を居く　花の後付と云なるまも

月の方より　西の方に出でたる
あまたり　そこ〳〵とみしるし
うへのこゝかめりい　あれなるうさぎうるあれ
あくれなるうりいみゆるとも　紅なるよみしうり・桂中納
そうこゝかちこゝ　言物語の紅梅こゝで貧女の事こゝの西かまど
をまゝ〳〵さ女のうち地こゝ未二度異変之事
うなるうへの事なるへし
用〳〵さ海うて　古よ物をも渡めず言て所語
物つゝみ〳〵うる　是を取あり源の口語
紅梅殿母と　めうもとみ〳〵とゝ

あるこゝ朱紅梅殿の家此さまもとゝ
なゝあ而なれいと　物語の文乃あれうゝを
用うゝまとの乃　うるなるあとこ
まうこけい　賀茂祭の歌院は樹也以月な
まばなり
たりへとも　下部こ
いさうよ　譜扱などうるへし　今迄高貴にて推量
うう高貴なりと
物語此面目なれ　東の院こ
二条院いとうる紅梅殿こ
なけのはすこ

てゝめしの人をいかゝとも知りさめとも地
世をすゝまれて
秋などうゝ人
なのめにをりあめ　ひとゝ共のとゝ
雨をなれをいてゝ
うゝ人ものゝ
ひとゝ人をとゝ
ふをゝひるゝ
をるれふうゝひ
ゝ人地也
をゝいゝ

海地

地をひ降りも　海八月中ふ生長し給
しあにうの花人のゝ
を海子のうゝひ
給ふ知給ふ
うゝ山の　海地黄色あるゝ
いれ給ゝみ切り
ゝとせをゝ地
ゝ組みゝ一あるゝ
茶の流　しめを色にあゝ地ひ
乃高地一期をゝ
ををうゝ
いとあゝりに　人ゝを抜し給地

みたきの山ぶし　一位五十余年にてのぶる

是も去年を書うり来年のうつり所をゆ御所の行末を祝ふ

うたてよはの　今ちと恋思すぐさ初秋

のうし

今すこしとすすうりも　双流

関屋

巻名以詞名之　おのつから此巻にて所々

あるやうの字い助のやみ字に所為を名付

よりさまくに所述とある所ようあづけ

さうり源女八方のみ月迄此巻をづて

末女八方の土月計迄の事あり　遂ぎて四月

此迄又ゆ御所を接る所為の事とき

述とも接の年也

いのれまつり　伊豫の介果て下向する

まうのをひうちふたりて　源氏侍従へ逢坂

しおうをを吉澤より成て下りうし

かれくまをも　空蝉也
津くば山の山を　甲斐がねは山おろし
吹風を人にもがなやことつてやらんの歌にて
かきり甲斐がねと常陸のつくばねは筑波に用
ひたるも此歌相模もしらずとりて相模の
山をかきえつらんと云也ざれハ甲斐ても面白
しらぬ也こゝは津てもよしあしへどもとられるやう
なる様ハありて御所なる事をさへ申も常陸
とやはかりしらぬ也朱されどもとれるやうに歌ざ
らぞとなり
かきさも雨ものも　涼の千歳へありし事ハ今度

また三千年也常陸にありしハいかにも此うたざれ
ハ二條后よりふくめ給ふめしふのかりむ唯什あり
手ふかり條路て三年めいのかるとみえたり
せきいる日も　常陸の守の入日也
車をとらせおろし　牛をとるが也轅をとれ
うそまり
くるいをとそうし　類ひろき旅よおとさせよ
めしおほせと仰せする
車をとゞめりて　今日ハ車十ある計あるとし
伊勢の　伊勢の斎宮下向也
何ぞやうの　賀茂祭などの事也

後もろく世とり　　長にあひとり様に　　源氏とり張弓
実盛とりさとろうれ　　とり張弓
とり出さうこまり居らる也
色〳〵のあを　　指櫛也　面布　裏絹　背
ハめハ地をとさとする　みとりそめ　ふも
あり　前すあをとそ　まをふいけあをのうち
をのけるる地　朱花云　櫛也　用也
法華ハをそれ　猿人の多きを　怪
ゆ地ざ　車　蓋さ　ふるをそれ
おろをすいをすき物
氏貴乃心

是も今ふ有する

実盛の方　源の方　ふ
ふる今日の実盛　キ　ふ　ふ
（新興あり　地　ふ　ふ
関をうぶして　人　ふ　ふ
ゆくこと　清水　ふ　源　ふ
元ふ　元輝の公中に　ふ
りふり　紫　ふ
清つのすけ　山　ふ
一日すり　ま　ふ
こうにまる　朱　源氏　ふ　ふ
智之あ世の　を海のう

紀伊のかみ
のありしなり　常陸のすけ紀の守之中河のやど
大きみ北そう　大ね也りの随身せしへ之ずぬ
へお随身にし也せ人々を庇護して己せ給之
罰をも撫くし給之朱けたる返点は伊るかる子也
すけめしよせて　佛つのすけ之
今ハ夢のさりにしめつき　来つの佐乃かた之宮螺
をとく手すれ給ハざ所なし
一日ハちきり　文の相行あの給ふハかた紀契
なりとあり
まうさん　むさうに殊運ぬれど邂逅れ

なきゆゑ也そはりもせず之不かつぬ海兵
ゑうめなさそとりなきよみあり
開るる乃　常陸のすけ系物もして具して
ふ海せしをやり
昔はをこしおかりのこと
なゝぬ所なりかてさうる也おはしのくとんなぎ　出家の源氏の随ひ
うるをやうりて逢会はりの給のし物なさとく
女かくハ　女紀なりそくハまくるしかぬとも也
今ハまして　宮録の也之
めてしよ　み地也
あかさの　宮やいつるほとよてふもとの之宮紀家

気（キ）すう〜ひと〜ふう源と定輝と共中将
くのごときと
草のやうに　うくさを見るよう
源氏物語
気もつくさと
太乃定の　定輝の事也　氏左世とうう
ばるやうみとと
のうとくみめもうる　氏る月高
さとくとう　いつれもとの敷とうハ徳
母（ボ）うるゆへ左うう
さくはうちれと
利ようけ方ようとをんこと

みもいとつ　河内ちる也
のようれはよと　弾生（ザンセイ）とおいくと也
あひなのはしらや　草の姿

繪合

以詞為巻名兩度之繪合(エアハセ)あり内〻みあ猟
とあえうり元天徳乃斉合うり猟(モ)てける
やみ〻をり北泉院を村(ムラカミ)よりうしみを
づ〻とは巻とれ乃一くるくへ源氏廿歳の
三月也物語のとゝ廿九歳のゝたうに
みを仕(シ)おの家の此とゝ廿九歳乃
ゝるつきれとみえうり其ハ右近(ウコン)衛(エ)の
間(シウキ)兵衛(ヒヤウエ)乃尉(ジヨウ)なる人〻ゝ殿ハ右近衛(ウコンエ)の
尉(ジヨウ)二月のるよの月あり此繪合なゞ
てゝゝるゝ〻きれとゝ

前新家此はすなり　秋好也冷泉院女御
小新殿と新家此人海家ありて八角の御
河海抄に八角殿朱一注云とゆゑなし
ましくきるかりめ手也
中家此　うすきも也西家のはなれども
兵今別小中家なりさて海ぞれうさかな
くもるも蔭もけ此八角のうへ下絵也
のうまの事蕎麦もの書りみて作り
とりそそる　源氏の心
二条院より　二条院より八角あるせどやと
ものの絵へども朱雀院をくぐり絵

そは百うなりて　八角の色也
うちみうりの絵　髪の具なれいあ乱りと云
くこと乃　此字清層あ絵
百梅のかうを　とるふの心朱とそく句
とこの人也絵　朱雀院ゆる也
後者絵りい此也
かくこの云　源さざめてみ絵
くなんと　源よみ也ある朱秋好へ也
中也女別帝榊に　秋好にあり
さくはこの　さくはこの字有感絵の大概
はは絵でてやうみと簡しきやうぐひを

つけてみるに朱大やうなる物
けり　さて也共梯子一注秋字額
さ行ちさかよさしぐらとより
まれちふ　朱秋字ハ此代一家句名
梯巻よてわれのくちけ物ハ冠家あ
まーさゆの此紐とうこつけそけるなる人
さ髪り弟ハいくあ行ちと
おくされをはらんて　ひ軽乃此青絵
大乗ふこ行ちは寄などらくとあるみる人
こ行
こ行こひめ　ひ軽乃此青絵
此景流へさいり行ちる物朱

雀院のはひをとーたり行
ふふくく　ひの角の事ふさて者乙一川の
る事ふ
つーとひとひゆこて　すゆのたせす
也朱諭君なでは事ふ朱雀院を振やもる物
まさなつーう　朱雀流のはひとりは
てもるとさすす
とはりうち孫め
こはゆ也い　源乃物
ふはせうそこも　流りふはみもるこ
朱雀りは乃事

いとあはすまうさ　はあまりてのみ弓箭と
さうしはうり　こまくらと思いなくさ
迷ふと也いとさ海ふもはあるまうてとて
もうらいて
いまくらあり出るうり　大将殿(ダイショウデン)その事也
はあ海(ナダ)をはるばる事をおどろかい法花経
をあげ五戒也
古は是不の　はは是不同興(ヨウ)ある事也
朱　其形のまはるは是不此事をいとあられ
まうとて　こうりてとは海家ありてこうりみ
はひそとの法ひ出るまうもなきと

朱　こうりて今なを敵(テキ)なり事なれたと
海のはあさ海　源の氏　社母乃はるとうは海
をいまうせるを法ひ　ふるさとふるに方に帝道
ちらまるいとはいんなく　はまをみをづ
今此世乃法花をあられ三をめなを
しは八十三歳計うてまいます
のそは年のさうまうさ海
みくき事をさん
あり法ふまうあり　ぬりはうぞやとと　義云源乃
心ぐも此なるひり流の法を案法
すりの事ね　系孫(サソン)みて修理(シュリ)事をとけさ

けんなりし系図(ケイヅ)よみにも朱一人之
よき女房なきにん　古法眼の時よりて始
人多くさかへらひ侍るし
気おろ仕ましらん　古法眼の事也
さらそえあらぬ　世の人いさゝかふやすく
ぎ事いありがたき之
中家も　内に藤原氏おすゝる之常にい
三条家にましますす之
家也　藤原也
人出れぞ　縫殿(ヌイドノ)氏陀ひ乃中之
こゝさてんまい　致仕(チジ)の御うしの女(ムスメ)おさかりま

しますれふあそびがらなまかつらひつき廷
こゝ道ハ人さまも　秋好之
あ子うち　弘き姫之
権中納言　致仕太臣いは家の中家みりと
ざひくまの世廷之朱中納言氏女(ムスメ)を后(キサキ)ふ
りと初りひしふ秋好をたでり廷之
院ハ　朱雀院之
御家氏くり　源の戸出して院の御ひとと
斌(コロミ)んとてこおふ宮(ミヤ)道ぬ本ふ御られし廷之
こうら氏流るをとく戸出し廷之
めてうしと　秋好の御(テイ)氏事之院い別(ワカレ)のく

さ一ぱいまぎれのうみもん
なりぱいぱるかよゆーくさぱる
ふみてされまちひ　奥づくるぱる　朱源も
いまぐさたてと月ぱるのぬ
ぎりぱる　射面（ティメ）ーうにいあびきちひな
どをいり朱連（ヒ）くのさぬををーりりそぬ
みるみんれを
くすれまなくて　秋好弘徽殿
無ぬ　ぱるこのうぬ　ぱれむをあの月ぬ
つきりおよみしうり蔵重（ヒ）の見ぬ
れ門ぱるひぱるみん　永戚（ヌイイセキ）也　無ぬ蔵

ぱれ月ぬ月なれバ也
ぬを無（ケウ）あるぱ月
まして月ーけるる
絵を物くするをぬ　秋好（テンジヤウビト）ぱ人みどさ人
など書ぱるを一の絵ぱ月ぱるる也
まかなる月　秋好
いまーめて　ぬーにかるめなどする也
月みみの　十二月の絵ぱ月人ー朱一注年（ヒ）
やまぶきの（ヤウギヤウシ）絵ぱるぬ月ぬ
ぬこるみぬも
これぱぬぬ
絵よぬをとめぱ月
秋めのぱるぬ

屋うり　　二条院の

女えと　　はつこと

長恨哥王昭君　　峰今事は始なる所なる　野

あるはいづれも不吉なる所なるやうのすいこ

とにづひたるとき祝ていさ打ぶ

さてみい　　これ　ひこ

のきひの　　沒子　その絵

さて今うん人　　一向ぶつ人也とも

　　気なるこ

いまして　　はつこの絵こ

ひとうめて　　すの海のきこ　ふ如ものも絵ひ

ふりとみゆされ今も也てうく續絵て

其ありは魁みいうやうの点など絵るへうり

しはとこ　ひ時ひふこも日光のやうにこ絵

しは初の皇ふ尺こうり唯とハ源うい今

迄尺也絵ひぶる由を絵へど源るもこ

はふこは給とびうく行也絵をも書て魁

ひへうり初とこ

うれあみ　　一二るハす海のこは此うろひ

とひうり涙ここい源彩こ湖こ波こをけう

るこ方に立海ひびくこなるこ

中文　　うすこ

さいなるまゝに　山中にくすべれ所を
撰び給ふ　絵合のまきに　ゆきかゝる中ふるさと
やうひの十日に　家にかゝる　ふるさと
あるのくらんし　絵合のこゝろ也
あるさうなる　弘徽殿梅つぼ也
ひめつや　秋好
みをくゆ　ふる絵ども也
うちみるめに　当世に絵なれいうちみる
きゝくく　目とまるこゝろ毎のめ也
今めかさ　実なるこゝろ也
こゝろのまゝに　弘徽殿い梅こゝろ

これはうまに　梅ゝ
中宮　梅壺也
こゝろ　梅壺
とりもち　朱　絵合の中宮すきの事
知てその事こゝろ　中宮のすきの事
ひとりみさと　是則内に絵合
二月也　初の八梅　梅壺ふるこゝろ　花ちるにあり　三月十
日ごろとみ　梅壺右弘徽殿也　梅の
夜乃ゝ　勿論也　もゝるこゝろ
いうそく　を撰こ　河海よみそう
ホとゝ　梅つぼ　方行ゝ

の物語之方(コ)余(ヨウ)小若(ワカ)菜(ナ)の事によめ給ハば此物
語にハあらん。六百番に顕昭(ケンゼウ)かくとりとよめる
云方余外夜なり別の事之
みよ竹のよに
ちん左代方より鶏(ケイ)を加(クハ)へ侍り　花なる小物語のちぎさいみしらう。
猶代乃事なれバ　もろると代と云くも面白し
弄　むろしと云ふ名宿生の事をいふハ神代(カミヨ)と云ふ名
めともおよびぬなるん　弄　左方の翁之左外夜の
事をかあるそこ給之。左方より却しりし
にあらへるるや
めしきかりしこき　弄　内裏(ダイリ)よりめし出給

みハまいらざりし也
あへのおほしか　弄　左方よりかたくしるる之弁夜
物語にあらずや姫ハ天人なれバ凡人(ボンニン)にあ
ふべしとて難儀なる事どもを云て或ハ蓬莱(ホウライ)
の玉枝(タマノエダ)又火鼠(ヒネズミ)の皮(カハ)衣燕(ツバメ)の巣(ス)の中なる子や
す貝(ガイ)などを取(トリ)てまいらせたる人に逢(アフ)べしといひし
に依(ヨリ)て此安倍(アベ)の右大臣渡唐(トタウ)の舟(フネ)を以て金
銀をつくして求(モトメ)させらるけれども終に
姫にみせたる事にて此者に即(スナハチ)焼(ヤケ)を
黒仍曲(テキヨクチカ)者ならずして人々にかくしたる
くりちれみこ　弄　親王まで是もかくや姫の

懸想人也蓮葉のゑがくを見なぐ侍て
めて見るゆゑ也 弘法大師を飛出く姫ふこと也
きる時ゑ造る工のまて神の表を責る
ゆく俗歌也 曲をりさ是もうくや姫乃
給をそ生りうる也 時の奇にとの葉を
うぐれゑ也 拔ゑ有けるとゝく
きいこゝのゑみ

朱 私勘除目成文抄昌泰二年二月除目 挑灯時平公 源波女 同従八位下
巨勢朝臣相覽 菅師 貴之 同 貴之
えやうみ 巨勢の音絃とゝ
唐の綺ゑて弾るなるへし

ゑ
ゑけハ 弘徽殿方へうつゝの物語十二
歳の時遣唐使ゑて波斯國ゑいり琴の彩
を学也 うつゝ末は中にゑて琴をひく事
あり 唐日本に新を弾ぜ俗に孝行の者也 阿
俗羅琴を造くらへしるあり
なゝひゑ
つゝのり 当時の絃師に業義物語中八
唐風そろへられ 朱 唐風ゝ
風ゝそい生ゝ かぐや姫ゝ書て
表朱雀の時代乃人ゝ

たゝい　たの芳（フトリ）こる也　右猪（ヰノシヽ）
伊勢物語　たゝ也
正三位を　右也　此物語今此代よみてぞ
　　死るゝ　こるゝ　こるゝ朱又太まこるゝ
　　ぞ　やう
たゝい　たの方へ
いゝ也の濁也　今やう此事不濁ましてゝ
　　こゝ物語いるゝ　きゝ
雲のうへ　正三位乃物語よあ事物へ
長谷たゝも此物語の中にるゝ人物へ
よにのがゝるゝ　こゝ也ちゝ此こゝ
伊勢の濁をいゝり

さゝ中ね　落雲也の物と定ゝ
家　みるめこそ　此奇を物語の此方此こゝ
ふたゝこゝ物語物語無ハ吾此方此結ゝ
やうにいの結ましきゝ　ゝ落雲の此方
なゝ人一今尼ゝ　ゝこゝ
ゝこゝ　ゝ海也ゝ
一まゝ　此書此書と肝要と爭也朱伊勢
物語正三位ゝ物最末の書此ゝ
這ハ用ゝ此合也
人のゝ家此

内のゝ歌文此ゝ此ゝ

初冬絵合八歌と内とをいく
ひあるまく　うたとの内にくとも天徳の
合を模をり
たすす海四人　たゆの想ども那〜絵うの
ひあるへ
み絵を　昔多分絹ふ書也紙絵いまれるも
今あるへあるん事ハ　源の方より出る也
今新ふるせるる曲とうさと也
院ふも　朱雀院之秋ぬをあげとるくあ
ひころるや　秋ぬを也
もあつや

五月四乃節会　五月節会絵
えんさの　朱雀院の代
されハ次り我ひ世とあり
み吉野よのるも　朱雀院の代
さんりち　乙巻也絵師也金屏ふ隠也こく
えんふすさこ所ちんの品　花る毎系あり
ちりすこ所管月流ふ孤元
ひく　ひる流下也
みいたさ也
こと楽して　院月屏風をゆうるもの
さこんのゆねを　弁くしさと也
うくしきハ

為そうく　朱雀院の御製と気をうけ奇也
今うあれ昔はれ大将殿の儀式いますれ物
をあてとなり
ひとつのれんぢ
裝束具をすうれて也幻術の鈿合を作へ
にうそへうり一陛欲家よ立居一時朱雀はさ
ぢうまを出て昔のうんざーというもるにあり
主あれ内へ　朱雀院のれ左衛乃時は妻家に
くあり対を立てきれ也と朱弥代の事と
ふたり方と也
ぬくをつ

双地へ
左弘徽殿の大臣うお作のこと
ささいの家うり
あれ女房　朱雀の御絵朱雀の方より利
侍てあ后は妹の方より作て桂中納言は方
の女房方ても作るへ
内侍はんの云　勝月殿はとぐみてます
ますあうりとのづう作り作ると朱絵はる
也朧月殿のうも也
ひとりみさ　たい物垂れ左弘徽殿西ひさ
うそたいれたい面也
女房のさうい　裳盤所へうとまりまれと

こうらう屋の　　御屋のあし

たゝいさてんのえこよ　　えうりさをあてそ

よにさてさづくと垂くそとれさ物より

ゆふれ唐絵をしきてそれよ机を垂そく

袖ゆふ檀の箱よ絵をへて垂さよたゆいうち

さてさいあをふのこまれ絵と汁ありてさて

机のうへ乃さてさ物といそずゆふみ草のあや

ふ畧てかさたこだたそりふ垂物に用

物たちへし

ゆふ云人　　雑役を勤ぶてき用しけ絵

おど屋さてむつてき用也ふ所あるた

あゝ色ゝ物ゝ絵のゝさみ　　弄云ゝぎみハ

童女のうへふさゝ物へ水干のうみれやうゝ

物へおゝ色乃うゝぎよ物ぎさゝのゆざみ

花子絵ハ清袖也おこあハ二すこと定める

ものゝ花立ねハ西うゝふ裏萌木をゝ

あをに　　花木よ黄のまゝつゝ

ゆゝゆのゝ

ゝみて花立をうみ

ゝ也花ゝ紙丁ゝ

ゝゝあを色ゝ柳のゝさみ　　ゝ色いゝりや

をふふあゝけゝる多ゝ二年あをあり

あをふゝふゝ濃花木ゝ黄れまゝをゝ

柳は面白く裏青きを云夜ハ卯花と云也
山吹がさね　面は朽葉裏黄なるは花山
吹と云面黄小裏紅なるをいふ山吹と云以上一伝
まへまゐりへと　右ハ左まゐり右ハ右也
そちの宮も　判者也蛍の宮之絵をとす紀給
なり甚るみとすくめしありて此絵の判
者をし給ひし
くみ給ハ絵りありて　絹ハきさグりもし紙
長絹お左ぎりうさのべさる面ありて内ぞと
云中へ河西氏あるゝ也朱昔ハ絹よ多く手まし
昔氏絵　宗紀古也朱今のあさたるかと云也

あさかれい　荒海の障子と云く清涼殿東
ぬへし云ハ朝餉と清涼殿と比あはひ
成所し
中宮も　藤壺之御方の絵なとの方より
気給ふなりける所しさと也
けいしへ　源の翔之
たなれ　左方一番の勝と之今一番なる
べき時も海の絵かちたり　源氏之海
紀比絵りを云ひすまして
書給たり
いかけたまさ給たり　源乃翔之

院の御とも
命さいてん　相撲の事也
りんさい　てんを改ごれ　顔回が不幸短命なる
そ〳〵御たり　言代絵〻
てきなるす　いてゝぬ事をみさせ
おりめをふりよ　を海の鶴ひの事也
なにのさえも　帥の宮の御
をつてゝうさんあ　法皇院帥能ある絵
なれいをのびゆ　絵出来帥も病ありあるとゝ
筆をるもと　絵師也
ふさらうを　初也ある絵ばかり絵する

まざとゝ人の意をやうあるをきなく
ゝするまざ也とれ絵いをろなる絵也
家のこ　うさ家のゝくらをのびぬむ人
も右あるとゝ
れ人うめけめる　源氏
絵をり器量をいり
それをうにも　連枝多くますゆに
源氏独傑出をる也ば帥宮も連枝也
文方　源氏の才学等比漫藏源氏信ゝ
琴ひる也　文をとび出して次よ絵を
云り礼系の次第をいる也やうふ絵の事

さる人の申さたに信云の事をもとに合めり
海さかさまに　つくかめ方角之一注
昔あまりに　たづめに後合八十日法之
こなさい　甚盤面むきさるれり也
ふんのつさ　如安之和琴（ゴン）おつるとこ云て
書可勝一注先和琴をけうさどる餘の琴（ガッキ）
の事はうに不見
将軍納云　源氏てうこで也
さえいと　源一人のやうはいどけ中納言
を源てをさる人と
う人の中に　家てう侍の人中
みこはは
みさきて
うくのまに中宮
と宮の御方を
まさのこと
うへまも
将軍納云は
うへ乃はのとり
さるよせちゑ
冷泉院をいて
実なる事をと

今日の判者こは
別して禄を
為方に
中宮と云
可勝
はは
まもと
公のやう
弘徽殿の事
弘徽殿
至今延喜天暦と云
冷泉院をいて
実なる事をとして
遊のもの

扨〻　源也　休退（キウタイ）をぐしたる也今すこし自己
もは成人もてこそひまの源氏殿（ゲンジドノ）也
あるこころなれよ形りて　次ての日也けり事
なほ今迄の命をたすけつと也命と喜とも
をおりいひよけつり万事可息之
山臺はなし也
書出し伝る也松風考てけるとなり
すゑの云ふ
夕旁明石姫君也夕旁もは
夕也夕明石もいとけなし
いふ事をきつる　みるなり